

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3337714649
振替 東京 0158431 労金 東京 東京労金本店 No.1154163

FAX(03)329915367

購読料 月額600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

- 「芸術」を楽しむ……………2
- 「五月新党」で一致した四単産……………3
- 自治労と日教組は丸ごと全通と全電通は山花派中心——
- ◇「阪神大震災」の周辺から(二)◇……………5
- 自衛隊出動が「地震 危機管理」だった?……………11
- 全面解決へ不動産の戦略構想をもて……………14
- 国労第一六六回中央委「傍聴記」——
- 二〇二億損賠「取り下げ」の成果を次の闘いへ……………17
- 資料 国労との「和解」にはだんご反対(丁R総連)……………18
- 読者からのおたより……………2
- ◇兵庫の仲間から◇……………2
- 「阪神大震災」に対するご支援のお礼とお願い……………2

刊 旬 社 会 通 信

NO.597

一九九五年二月一日

一九九五年三月一日発行
(毎月一日・十一日・二十一日三回発行)

■ 巻頭言 ■

「芸術」を楽しむ

テレビのない私は、「読書」はもとより、たまには時間を除いて、クラシックの演奏会や絵画を楽しむに行きます。ときには「映画」も見ます。とくに、この芸術分野で、何か手掛けたり、「評論」したり出来るわけでもありません。しかし、生演奏を聞いたり、絵画を目の前にしてなんらかのを感じることが出来ます。もちろん、すべてというわけではありません。それは、日常生活では感じえないものでもあります。だからこそ芸術というかも知れません。

私たちの周りの仲間では、「クラシック音楽など解からない」、「絵など見たってなにも解からない」という声をよく聞きます。日常活動や仕事の疲れによって、とても芸術を楽しむなんて出来ない、それよりも、寝ころがってテレビを見たり、酒やギャンブルに走るという人もいます。むしろだからこそ、私は「芸術を楽しむ」ことをすすめます。広く豊かな心を持ち、視野を広げるためにも、そう思います。(私自身はまだまだそこまですてません)

「芸術」に接することによって、ふだんと異なった「精神」の働きが展開されると言われます。最近読んだ本の中に、例えば美術に関してこういっています。

「美術とは何か。美術とは見ることに尽きる。そのはじめもおわりも、見ることだけである。それだけしかない。

見るとは、しかし、いったい何を意味するのか。

見ているうちに、われわれのなかで何かが、すなわち精神が作業を開始して、われわれ自身に告げてくれるものを知ること、それが見るといふことの全部である」と。

音楽にも同様なことが言えると思います。音楽は聞くことに尽きる、ということでしょう。そこには、評論や理屈、解釈は別問題です。

とにかく、いろいろなことに接し楽しむことで視野を広げることによって、いろいろな人も知合えます。

(M)

◇ 兵庫の仲間から (護憲社会党委員長 岡崎宏美) ◇
「阪神大震災」に対するご支援のお礼とお願い

一月一七日未明に発生した「阪神大震災」に際し、直ちに救援活動を開始いただきました各位に心から厚くお礼を申しあげます。

私たちも、想像を絶する災害の中で、皆さま方の励ましに応え、全党一丸となって救援・復旧へむけた諸活動に立ち上がり、全力を投入いたしております。被災された人々が一日も早く、日常の生活を取り戻せるよう頑張りぬく決意です。

なお、皆さま方からの救援カンパにつきましては、再建準備会(護憲社会党)として下記の口座を設けさせていただきました。今日までのご支援に重ねてお礼を申し上げますとともに、引き続きお力添え賜りますようお願い申し上げます。

《銀行口座》

●銀行名 さくら銀行 ●支店名 神戸営業部

●口座名 護憲社会党「阪神大震災」対策本部救援カンパ 本部長 岡崎宏美
●口座番号 7557183

「五月新党」で一致した四単産

——自治労と日教組は丸ごと全通と全電通は山花派中心——

山花・田辺派存亡の苦境に立つ

山花・田辺新党派は、一月十七日に提出していた社会党からの会派離脱届を二月十五日に取り下げることを決めた。これを、久保書記長は十六日の社会党中執委に報告、了承された。

山花派（衆参二十四名）の取り下げについての「集約」（外部への発表）は①新党の結成は党内事情だけによって左右されてはならない。しかし震災対策立法等の一刻も早い成立が求められている。②この現状から、党外の同志との合意を得て、当面は、自治体選挙の地域の同志の当選に全力をあげる。そして参院選をたたかうため、自治体選挙後速やかに新党を結成する。③党外の同志の理解を得て、久保書記長に我々の決意を伝え、会派離脱届を取り下げるとなっている。

これによって建前上は山花新党結成になお望みをかけており、今度参加していない他の「新民連」関係者に働きかけ、五月に一挙に旗揚げしようという意味をいつている。しかし新党派内はすでに二つに割れており、社会党中執のすすめる丸ごと新党派論に屈服せざるをえない迄のようだ。突出離党グループは二十四名のなかでも少数派になっており、一応自治労、自民党、村山派などの圧力が効果を上げたといえよう。

新民連が事実上分解した第一の原因は、なんとといっても全通、全電通の気力を落しての後退にある。全通は山花、田辺、関山などの癒着議員を中心にハツパをかけ、当初は早期離党・新党へと突走っていたのだが、全通の全国組織内は必ずしも同調せず、加えて自民党・政府側からの郵政事業の分割民営化をすすめるという攻勢をかけられ、かなりヘナヘナになった。全電通の場合も、当局のリストラ・合理化に全面的に協力しているが、そのうえまた全国いくつかに分割されたら組織がもたないという危惧があり、山花新党と運命は共にできないとしている。したがって最近の全電通は、山花派に資金も出さないというほど戦術転換をしており、山花派はいよいよ苦境に立たされることになった。

孤立感ふかめる全通、全電通

全通労組と全電通は孤立感を深めている。昨年十二月段階の強気の姿勢はどこへやらというところだ。全通の基本的方針は（労組としての）①自社さ内閣には反対である。②民主・リベラル新党で参院比例区をたたかうためには、反対が強くなるので七単産（鉄鋼、電機、自動車、ゼンセンなど）の委員長全部立候補するよう努力する。③郵政事業の民営化を阻止するためには、新しい政治家が必要である（新進党などか）。④全通委員長を落とすわけにはゆかない。よってリベラル新党の衆院候補との提携が必要である。というものである。これは昨年十二月二十一日の第五回地本委員長会議への書記長報告である。

同二十一日の地本委員長会議での討論のまとめによると、書記長報告を全体の合意として確認する。引き続き中央主導で進める。新民連新党は、社会党丸ごと新党ではない。参

院選は新民連新党に連合は結集、マタ裂き状態を解消する。新民連が選挙協力を行なう対象は、新進党を想定するが新進党は分裂の要素を含んでいるのでそのときは別途とする。

このように全通（全電通は当初からもっとトーンダウンしていた）労組は「身も心も」山花新党にかけていたわけであるが、前記の通り山花新党は自治体選挙前にはもちろん参院選前にも出発は困難になり、右派議員全体がバラバラの対応になる。そこで全通と全電通は、自治労と日教組との協調で失態をカバーしようと動き出している。

四労組ともに一応は「参院選前の新党結成」で一致しているが、明確な展望はない。自治労はかねてからの主張である「社会党丸ごと新党論」であり、右派の切り捨てには批判的である（どこまでが右派かわからない）。さらには山花・田辺派主導の新党には反対で、あくまで党機関の決定重視の構えである。

一番の食い違いは、どこと組むのかであるが、自治労、日教組など村山派は「新党さきがけ」であり、全通、全電通は新進党であることはよく知られていることだ。自治労、日教組など村山支持グループは、さきがけとの統一会派の結成、そして新党へと考えている。しかし「さきがけ」はせいぜい選挙協力まで（自民を含めて）しか考えておらず思惑どうりには進みそうにない。したがって参院選前の五月新党説はさらに先延しされるであろう。

統一地方選、参院選前後に波乱必至

ただ問題は、第一に予想される統一自治体選挙の敗北、つづいての参院選への意欲後退と当然両派内から起る敗北責任論をどうするか。

第二には、五月段階に地方組織も含めて起る社会党再建論と絶望論、そして新党早期結成論と討議による参院選後論など、まさに党内混乱と各派入り乱れての対立抗争をだれがどうまとめるのか、それとも分裂か。

一方村山内閣も内閣改造や阪神災害復旧などで局面を乗り切ろうとするが、参院選で大敗すれば退陣に追い込まれる可能性が大になる。ポスト村山は一応社会党からとなろうが、党内まとまらず（分裂さえ想定されるだけに）、結局自民党へ移行する。そのとき自民党内も混乱し、新進党も分裂して保守連合の可能性もある。

だが自民党は自治体選挙と参院選に、新進党を退けて「一人勝ち」すれば、次の総選挙を早めに想定し、再び一党保守支配体制づくりに意欲を燃やすことになる。

社会党やさきがけの第三極論は、中選挙区制でなら通用するが、小選挙区制では比例区頼りに政党（社会党の場合はその「らしさ」を）前面に立てて、いくつかの重点小選挙区を中心にできるだけ多くの候補を立てることではか生き残れない。今のような分裂状態や労組機関頼りでは話しにならない。

これからの課題は――

① 社会党であるまでやるという党員で、護憲と勤労者政策（ことにリストラ失業の反対、反合理化）で党を再編すること。

② 勤労者の党として再編するためには消費税反対と労働者運動などの大衆運動を基礎になるべく多くの候補（いわゆる護憲派の）を参院と衆院の両選挙に立て、小党からの出発を拡大充実させる。

③ 各地域で各県、各市町村で統一自治体選の今から前進できるよう全力を傾ける。地方議員の勝利は当面最大の仕事・任務である。

（政権研究班）

◇ 阪神大震災」の周辺から (二) ◇

自衛隊出動が「地震Ⅱ危機管理」だった!?

神戸復興を人間を大切に作る社会づくりに

神戸大震災からはや一ヶ月、政治は神戸市民を支えているのだろうか。彼らを横目に「有事体制づくり」に狂奔しているのでは？

日本の別名は「地震列島」、地下奥深くではプレートが攻めぎあう。どういふ街づくり、社会が必要か。「阪神大震災」の周辺からは、生々しい現場の直感から明日の日本の社会をとらえる。

(I)

連絡がとれない

その後、灘区の親戚と連絡が取れないという先輩から搜索の要請があった。行方不明ダイヤルにかけてもかからないそう。風呂に入りに来ていた友人も西宮の親戚を捜しに出かけるという。翌日神戸まで動き始めた地下鉄に乗って生田警察の行方不明受付に届けた。電車はまるで東京並みのラッシュであった。途中の乗換駅の売店で、のどアメを買おうとしたら、前の客が使い捨てカメラを買っていた。人間というものは本当に好奇心旺盛な猿だと思わずにいられない。神戸から歩いて行くのだが、大勢の人がたばこをふかしていた。どこでガス漏れがあるかもしれないというのに、こんなことでは二次火災は防げないと思った。驚いたことに、北区ではガソリンは売り切れになっているのに三宮では小さなガソリンスタンドが開いていた。生田警察で死亡者名簿を閲覧させてもらったが、そこにはなかった。しかし、身元不明死体はどこにどれだけあるかわからないという。灘警察に連絡してみなさいというので、灘署に電話してみると、行方不明は生田警察で扱っているという。その生田警察からかけているのだという、とにかく現場に行つて聞いてくれということだった。

生田警察から歩いていては時間がかかるので、灘総支部に電話して見てきてもらった。阪神大石駅の南はほとんど倒壊していて絶望的だということだった。近くの大きな避難所には名前はなかった。近所の人に聞いたらそのアパートはすでに以前に建て替えていて、住人は引越しているはずだということだった。とりあえず調査結果を先輩にFAXした。先輩は長田から被災してきた人を迎えに職場を離れているということだった。

その夕方、風邪がひどくなってきたのでかかりつけの内科に行つた。二〇人ばかりが待っている中で、二人が北区に避難してきた人らしく、家の倒壊で保険証を持ち出せなかったけれど何とかならないかと窓口でやりとりしていた。

夜になって先輩と電話が通じた。明日灘に搜索に出かけるという。しかし、二人とも絶望的な気分であった。

無法地帯

灘総支部の先輩からはとにかく一度灘がどうなったかを見に来いという。ガソリンも被災地ではあるということなので、翌日はバイクで灘に行った。渋滞のひどい道路では五〇ccのバイクにノーヘル二人乗りで一方通行逆進の連中が、交通整理の警官に道を尋ねるといった風景があちこちにあった。なんでもアリの無法地帯となっていた。実際に新開地のコンビニストアのガラスを破って略奪している子供達を見たという人もいた。この動乱の中で人間のありとあらゆる側面が顔をのぞかせている。選挙の担当地区は阪急より北の山の手であり、被害は北区と余り変わらないように思えた。総支部に立ち寄って感想を述べると、南へ行ってみるといふ。JRより南は軒並み家屋が倒壊して、六甲道駅のガード下はくぐるのにも気が引けるほどだった。昔懐かしい町並みは突然消え失せて、埃と焼け跡のくすぶりが鼻と目をついた。地盤が沈下したためか、橋が二〇センチほど道路より高くなっていた。右翼がトラックで乗りつけて救援物資を配っていた。

雨、ビニールシート品薄に

総支部に帰ってみると、被災民となった黨員が、数世帯ここで暮らしているという。家族を疎開させて西宮から歩いてきたという人もいた。マンションは入口がゆがんで危険な状態だという。集まってきた人がそれぞれの被災状況をしゃべった。被害が軽かったので一人だけ浮いた格好になった。何でわたしただけがこんな目にあわされないといかんねん。突然襲ってきた生活上の落差、ぶつけようのない怒りがうず巻いていた。

しばらくすると近所のおばさんが屋根のシート掛けを手伝ってくれと呼びに来た。総支部裏の路地に入ると、倉敷からシートを持ってやってきたという親戚の人が待っていた。そっちららよく入って来れましたなと問うと、兄貴の身障者手帳を見せて、この兄貴が死にそうやから助けに行くんやと行って、姫路からの通行手形のステッカーを手に入れたという。明日から雨になるといふ天気予報でビニールシートは突然の品薄になった。総支部の人に聞くと大坂を歩き回った人が三枚しか手に入らんかったらしいという。斜めむかいの人は朝十時から姫路に買いに行ったが午後四時になっても、戻って来ないという。このおばさんが向かいの筋にある一軒に目をつけて、その空き家だったところに入れぬいものか交渉してみた。大家は、大工を自分で入れて修理するならといった。それを相談に帰っている間に、他の誰かがやって来て一〇〇万円の手付け金を払って契約してしまっていたと言う。

空前の住宅不足

空き家だらけだった古い賃貸住宅に、突然の、空前の住宅不足がやって来ていた。大企業は素早く手を打って、社員の住宅確保のために空き家をおさえて回っていた。翌日、加古川に出てみると、加古川でも空き家はもうなくなっていた。お金のある人はホテル住まいをしていると言う。ホテルも満杯だった。気のつく人は震災翌日には引っ越していたと言う。家賃もじりじり上がり気味だと聞く。何とか残ったポर्टアイランドの高層住宅もライフラインの切断で、トイレで流す水をバケツで運んで上がっている。これでは橋が通れるとなれば一斉疎開が起こるのも無理はない。

逆に、まだ住めそうな賃貸マンションでは、倒壊の危険があると言う理由で賃貸契約の解消を迫るオーナーがはじまっている。今の入居者を追い出して、新たに入居者を募

集すれば家賃は自然に上昇して言うことだ。住宅問題の解決が求められている。半壊家屋の撤去費用も公費負担となり、一月末には仮設住宅も七万個の建設が決まった。被災した人口の圧力がこれらの対応を生み出している。しかし、仮設住宅はしよせん仮住まいに過ぎない。内部でけんかの始まっている。避難所生活は早期に解消しなければならぬが、仮設住宅の後の住宅政策は政治に左右される。

持ち家政策で住宅供給をまかなうことは無理だ。二〇年のローンを払い終ったところで住宅が全壊した年金生活者にローンを組む余裕はもはやない。また、ローン支払途中の人が建て替えて二重ローンとなることも不可能である。政府は低利融資で民間による住宅供給を刺激するそうだが、その恩恵を受けるのは金持ちでしかない。三〇万の住宅難民に住宅を供給できるのは、極めて安い家賃の、所得制限を大幅に緩和した入居条件の公営住宅の大量建設しかないだろう。震災の経験を生かせば新しい住宅は低層住宅にすべきであり、一回は老人や身障者に優先的に割り振らねばならない。エレベーターがなくても良い住宅を大量に建設すべきだ。これによって上がり始めた民間賃貸住宅の家賃も下がることになる。政府は住宅問題で被災者を不安に陥れることによって、疎開を進められなくなり、よけいな負担を支払わされている。住宅は確保するから安心せよ、とりあえず疎開先のある人はそちらへ避難してくれないかと表明するだけで避難所生活の避難民は激減するだろう。

問われる政治

被災民の不安を駆り立てて、そこへボランテアや公務員の労働力を投入して、食事と水と風呂を提供して飼育している今の姿は悲惨だ。避難所の住民の中には災害復旧に使ってもらいたいという人もいる。そうした要求にはなんら答えることなく、ひたすら墮落させようとしている今の対策には人間らしさがあるのだろうか。そして、救援に駆り出された県庁職員は、寝床と食事は自前で駆り出されているのである。

救援物資を分けてもらって食事にありつき、公園のテントに割り込ませてもらってやつと寝る事ができるといふような対策の中で、管理職には休日出勤の手当を出すから請求するようにという文書が職場を回っている。JRでは国労組合員を相変わらず仕事の干渉しにしている中で、民間下請労働者が災害復旧に駆り立てられ「おまえらはええの」とののしられるような状態に置いている。こうした事がらを暴露し、被災民と連帯して行くことがこれから求められているだろう。

入浴に二〜三時間

被害の程度の少なかったものは、何かしなければと思っている。集まることもママならず、通信もうまくすると接続されると言う状態では、上からの指示は下りて来ない。灘からの帰り道、夕暮れに並ぶ銭湯の行列に度肝を抜かされた。何百人と言う列の人々が足踏みしながら寒さをまぎらわせて待っていた。実際にならんだ党員の話では男で1時間、女は3時間待ちだという。

とりあえず、風呂にも入れないでいる知り合いに、風呂に入りに来てもらおう。受け入れ可能なところと連絡をつけて分散すれば何とかかなるだろう。こうして、風呂と洗濯の受け入れが始まった。こんなことは階級闘争とは何の関係もないかもしれないけれど、健康で文

化的な生活を突然奪われたものと、そうでないものとの格差を生めることが当面の課題だ。この取組みが聞こえてくれば、何で彼らだけと言う話になってくるだろう。そうしたら、それらの受入が可能になるように受入先を打診して増やしていけば良いのだ。この取り組みは、我々だけではなく、近所の商店主の人もやり始めた。

風呂に入りに来てくれた人と、話をしてみると、ここでもいろんな感じ方と言うものを聞かされる。市役所の避難所でビラが配られていた。その中身はおにぎりを暖めるための電子レンジを二〇台要求しようというものだった。この話をしてくれた人は、家は残っているが家財は全部失った。私も電子レンジ欲しいわ。何考えとんやろか。被災民がその程度の差によって分断され始めている。

同じような話は、トイレ清掃のボランティアを求めていますという放送にも感じた。体力のある人で組織だった清掃をやり始めなければ避難所への救助物資は届かなくなるのではないだろうか。

古代ローマ・アテネと神戸

古代ローマは紀元前五八年護民官クロディウスによる給食を開始し、紀元前四六年には七五万人のローマ市民のうち三二万人が給食を受給していた。自費で武装し得る自営農アシドゥイは、本来の基礎的構成員であったが、地中海の商榷権をめぐるカルタゴとの戦争で死亡したり、戦傷による労働不能によって、門閥貴族の債務拘束を受け、やがて土地を失ってプロレタリアという無産市民に転落した。三次にわたるポエニ戦争はこのアシドゥイとプロレタリアを兵士として戦い、ハンニバルによって陥落寸前にまで追い込まれたが何とか持ちこたえて、逆にカルタゴを滅亡させた。アシドゥイの失った土地は門閥貴族が集中して、戦争で捕らえた大量の奴隷労働による大規模農業経営ラティフンディウムを成立させていた。護民官グラックス兄弟による改革の眼目は土地の再分配であったが、暗殺によってこの改革は進まなかった。土地の再分配に代わる保護策として穀物配分が行われることになった。政治家はこのプロレタリアにパンとサーカスを提供して人気を取り大土地所有制度を維持した。逆に、プロレタリアはこの保護策の中で自活する能力を積み取られていった。

古代アテネはローマとは別の道をたどった。アテネでも地中海交易の発展の中でポリスに貨幣が流入し、共同体構成員の格差が拡がった。この共同体の危機の中で、下からの農民の不満と新興勢力である新たな富者が結びつき、旧来の貴族支配が打ち破られていく。これが僭主制である。しかし、僭主制に移行する前から、債務奴隷となつている共同体成員に対する債務の棒引きがソロンの改革として実行されている。僭主ペイシストラトスがやったことは農民への財政援助であった。この一連の改革の結果、中小農民の基盤が確立され、この経営主が労働力の不足を奴隷購入によって補充していた。アテネの農民は一人から二人の奴隷を購入し、自分と一緒に農作業に使役した。この奴隷労働の収奪によって自費で武装する重装歩兵が可能となり、この自立した兵隊はペルシャの大軍を打ち破った。アテネもローマも奴隷制ではあったが、共同体成員の自立か保護かで大きな違いを生んでいる。今は保護される外ない震災の被災民もやがては自立を勝ち取っていかねばならない。その方向を見据えた復興のアウトラインが示されなくてはならない。

無視できぬ失業問題

住宅問題に次いで大きな問題は、大量失業の問題である。工場や事務所を失った中小企業での解雇が進んでいる。中小企業の再建支援を進めると共に、このような形の解雇を取り消し、事業再開までの間の失業保険給付の延長などが臨時措置法として制定されなければならぬ。J.R.等という大企業が工場設備の損壊を理由に工場の操業停止に動く可能性もあるようだが、これらは震災を理由にした悪乗りである。このようなことを認めていけば関連下請企業でも失業が拡がり、社会不安は一気に爆発することになるだろう。港湾設備の崩壊によって仕事を奪われた港湾労働者は、当面荷役作業を失うことになる。とりえず、復興事業に従事するとしても、新しくできた港にこれまでの仕事はない可能性が強い。港湾設備復興のアウトラインの段階から要求を突きつけておかなければ、復興景気の去った後に失業が待っているということになる。地震は自然災害だが、その後によって来る失業は人災であり、政治の方向によって何とでもなる問題である。

大の虫を生かすために小の虫を殺すということが、地震の後の電気の復旧において実行された。停電復旧の時間を短縮するため、漏電の精緻な点検を飛ばして電気を流したのだ。このため、通電直後の二次火災があちこちで発生した。関西電力では因果関係がはっきりしていないと否定しているが、実際に電灯がつくようになった途端バチバチと音がして火の手が上がったカーペット屋さんの話等調べていけばいくらでも出てくる。早く電気を通してくれという電話は殺到したそうだが、それによって隣の家が燃え始めてそして自分の住居も灰になった人もいることだろう。寒さに震える人たちからの電話によってこの安全無視が執行されたことは考えられない。もしそうであれば関西電力は安全とスピードのどちらを取れば良かったのかと居直るはずである。むしろ、コンピュータを稼働させるために強行されたのではないか。地震によって自家発電装置も役に立たなくなった工場や、オフィスに電力を供給することのために多くの家が焼きはらわれたとしたら、その家は今の社会システムが焼いたも同じではないだろうか。

水そして私権

火災との関連で水の問題もクローズアップされている。確かに神戸をはじめとする阪神地域は淀川水系からの水に依存して、その水道管の破裂が致命傷となった。水をどこから手に入れるかということは町づくりのアウトラインの段階で決まってしまう。大量の水を消費する今の生活そのものの見直しから始めなくてはならないだろう。この時忘れてならないのは、水ほどにリサイクル可能な資源はあまりないということである。合成洗剤を追放して、微生物による汚水の有機物分解を進めれば、処理後の水は上水としては不適当でも、中水として風呂やトイレに何度でも再利用可能である。六甲山にトンネルを掘ることにかけては人一倍の執念を持っている神戸市が六甲山の裏側に水源をほとんど持っている。六甲山の裏側はゴルフ場だから、今さらそちらの水源を振り向けてもらっても農業の水溶液をもらうことになるだけかもしれないが、ゴルフ場をもとの混合林に変えれば人間の飲み水が復活するだろう。

山を削って海を埋め立てる開発行政では近くに水を確保することができなくなる。保水力のある山を育てることが水に関するキーワードである。神戸空港等の新たな開発計画は

ただちにやりやめて見直しを図らなくてはならない。地震の後の火災は恐怖であった。しかし、長田区の新長田駅周辺は神戸市の立ち退き命令の貼り紙が張られていた地域でもあった。あの火事を違う感覚で見ていた人間がいることも事実である。彼らにはすでに再開発の青写真はでき上がっている。しかし、それは地震災害の前のプランであり、地震で困った点が盛り込まれているとは考えられない。相変わらずの開発行政で再建されたとしても、それはその町に住むものの立場から離れたものでしかないだろう。私権の制限がひとり歩きすれば良い結果にはならない。この点にも監視が必要である。

内部留保金はいつ使う

今我々の回りには下を見て自分を慰める心理が蔓延している。全半壊や全半焼に住む家を失った人は、この震災で亡くなった人のことをあげて、命だけでも助かったのだから自分はよりましたのだと気持ちの整理をつけようとしている。しかし、あの震災で命の助かった者の方が、命を失った者よりは良かったのだと確実に言える事態ではないのではないだろうか。住む場所も仕事も失って放り出された人々が見ているのは生き地獄なのではないだろうか。みんなが下を見て自粛するようになったのでは何も前に進まない。

地震の翌日、阪神電車も阪急電車も賃上げ申請だけはきっちりやっている。会社が損害を受けたからと、春闘からの離脱・賃上げ放棄を表明する労働組合幹部との違いは歴然ではないのか。こんな時に取り崩すことでもなければ内部留保はいつ使うのかと聞きたくある。再建のための費用は国家から手当てしてもらって、労働者は自粛してくれて、こうなればこの際これまで踏み込めなかつた合理化もと事態は進みつつある。

神戸への支援とは

全国の仲間から、何を支援したら良いか問い合わせがある。地震のどさくさを利用して進められようとしている合理化や賃下げや首切りに反対して戦う全国の運動をつなげてくれることが一番の支援になる。震災直後に尼崎に支援本部が設置され、国労闘争団や全労協や京都コンピュータ学院の争議団や、多くの方が駆けつけてくれたことをかなり経過してから知った。連帯に感謝したい。

当初は物的人的支援を必要としていたが、これからは全国に闘いが起こることが何よりの支援となる。N T T分割も、分権合理化のための市町村合併促進も、兵庫では今それどころではないという中で進められようとしている。そして、兵庫も今の混乱期が過ぎれば同じ攻撃が待っている。失業も震災も、健康で文化的な生活を突然奪うことになりはしない。地震のおかげで日経連のベアゼロ春闘が達成されたとなつては、悔やみ切れないものが残ってしまう。しかも、復興の財源をめぐって消費税の前倒し引き上げや税率の更なる引き上げがやられたのでは被災者はたまらない。

有事立法は火事場泥棒

危機管理をめぐっても有事立法がこれで通されるのであればまさにそれは火事場泥棒である。被災地域から脱出する車の群れに戒厳令がしかれて封鎖されることを考えてみるだけでどんなことが起こるか想像できる。軍隊の命令に逆らうものはどうなるか、見せつけられることになるだろう。

自衛隊に対する兵庫県の出勤要請が遅れたのは、法律の問題ではなくて幹部職員が集まらなかったことに起因している。出先の管理職は本庁に指示を仰ぐが、出勤してきているのはヒラの若造ばかりでどうしていいかわからなかったのが実態であった。だから、社会党の総理大臣でなくても、今回の場合対応は遅れていたはずである。だいたい、平時に人を殺すことばかり練習している軍隊が、地震となったら真つ先に考えることは、外国からの侵略阻止と、治安維持であり、その先に被災民の救出があるだろうことは想像に難くない。

軍備削減で災害救助隊を

軍隊を縮小して災害救助の機材をそろえ、救出技術を訓練している災害救助隊こそ必要なのである。復興費用も軍事費の削減によって創りだすべきである。こうしたことは、自粛のムードにのまれていては勝ち取れない。

このレポートのタイトルは震災の周辺からとさせてもらった。比較的被害の軽微なものが少し落ち着いて書いているからである。震災の中心にあった人々は今でも生き抜くこと自体が大きな闘いとなっている。しばらくして気持ちにゆとりがもてるようになったら、震災のど真ん中を生き抜いた人々の報告が寄せられることになるだろう。その報告を期待しつつまとまらない文章を終えることにしたい。

最後になったが、この震災で我々は光本昭さんを失った。日ごろは喧嘩ばかりするようになっていた我々が、光本さんの死に対しては一樣に悲しんでいる。もっと連帯感を持って教えてくれるようなこともある。光本さんとの最後の電話で「情勢がさっぱりわからんようになった。何か書いてよ。」と言われたことが彼の遺言になった。あの時は君も書けなどと偉そうなことを言って、自分のずばらを棚に上げてすまないことをした。遺言の執行にむけて努力することが彼に対する生きていく私の任務だと思う。(藤原 了)

全面解決へ不動の戦略構想をもて

——国労第一六六回拡大中央委「傍聴記」——

(一)

昨年一月二四日、センサーショナルに報道された二百億円損賠訴訟の歴史的和解。本誌五九四号の佐野論文でも喝破されたように、この和解によって国鉄闘争が全面解決をめぐる競り合いの段階に入ったのは衆目の一致するところだ。

明けて一月二五日に開催された国労第一六六回拡大中央委員会は、その二百億円損賠和解の意義と闘争全体の到達点を確認し、あらためて全面解決に向けた戦略を練りあげることに最大の任務があった。全面解決がまだ遠い先の目標であった時期の戦略ではなく、手が届くところの具体的な目標となった時期の戦略である。それはより集中され、総合された戦術の駆使を伴うものであると同時に、国労の確固とした未来を展望した構想豊かな戦略であることが求められる。

国労内部に事前討議抜きのプロダクション式とせざるをえなかった和解に不審がくずぶり、また外部の支援者の間には「国労路線転換」と煽った報道に接し、『階級的労働運動消滅への曲がり角』を直感した複雑な思いが錯綜していた。国鉄闘争に対するそれぞれの立場や距離感から生れるこれら種々の思いを束ねる戦略構想は、弁解や単なる経過報告とは別物である。闘争の到達点と次への展望を冷静に、客観的に、揺るぎない確信をもって提起しなければならぬ。

(二)

中央委員会の『当面の闘争方針(案)』には、二百億円損賠和解の意義について簡潔にこう書かれている。

「一〇四七名の解雇撤回、JR復帰、すべての不当労働行為の全面解決の緒に就いたものであり、これを契機にたたかひの戦線を一層広げ、攻勢に転ずる機会としてとらえることが重要である」

全面解決の緒であり、攻勢に転ずる機会であると位置付けられた今回の和解。そこには、要求を切り下げて闘争の収拾を目論むいわば逆コースの発想や姿勢は見当たらない。

「適切な対応」「おおむね評価」「判断に誤りはない」「取り扱いは了承」「大きな勝利」「大きな成果」「貴重な成果」「組合民主主義の問題はあるがよしとする」「判断は正しい。これ以外になかった」「正しい選択」「こうせざるをえなかった」「有利な和解」。発言した

中央委員はみな和解を前向きに評価し、歓迎した。

どちらかといえば胸を撫でおろすような安堵の気持が強い。一九年に及んだ裁判闘争、国労に突き付けられた合口、敗訴になれば組合費を差し押え組織を滅ぼす究極の非常手段、解雇撤回闘争の解決水準を切り下げる重石がなくなったのだ。国労会館明け渡しという代償を払って得た「成果」である。

国労は「敗訴」を想定し、その判断に基づいて訴訟取り下げの和解を選択した。敗訴か、勝訴かその判断の是非を問うてもあまり意味はない。仮に勝訴したとしても控訴され、全面解決の日まで裁判闘争は続く。しかも、その全面解決の緒は向こうから離れていく。

したがって今回の和解は、水面下で折衝を重ねてきたトップが責任をもって判断を下した「最良の道」(方針案)である。それ以外の道は評論の域を出ない。しかし、ここにただ結果を伝えられるだけだった組合員のもどかしさがある。二百億円損賠の和解は、政治と裁判の巧みな技術に依拠するほかなかった。だからといって、同じ手法が解雇撤回にかかわる裁判にも適用されるのではないかと推測するのもまた見当外れというほかない。

しかし、今回の和解をもって「勝利」と判断するのは早計である。全面解決の緒についてはかりであり、本格的な攻撃に転ずるたたかひはこれからのだから。

(三)

方針案は、昨年の全国大会以降のたたかひで手にした成果を三つ指摘している。二百億円損賠裁判の和解のほか、新宿車掌区拒務差別事件の最高裁判判決、六本の中労委命令である。

「国労の組織率は100%だったが、分割・民営化後51%になった。ずっと職場の小さなたたかひを積み上げてきた。それでわかったことは、仲間が三食の食事をともに食わせ

ろと怒っている。メシも食べられないほどきついバス行路がつけられてきたのが原因。人間として扱われていない。だからメシをくわせると助役に抗議する仲間、突然の呼出しに応じない仲間、そういうすさんだ職場を国労が少しづつ変えてきた。」

三つの成果は闘争団、JR組合員、連帯・共闘の総合力とその運動の結果である。この総合力をさらに高めることが、ほかでもなく攻勢に転ずるもつとも確かな道である。

「八年前弁護団から、決して労働委員会に依拠してはならないと言われた。組合員が傍観してはだめだ。何らかの形でたたくいに関わること。JRへの申し入れ、組織拡大など一つひとつを粘り強くやる。本部の指示は各地方が確実にやりきる。地方ごとに勝手にやるべきでないように。物販も結果を集約し、総括する。それをやらないと単一団体がバラバラになる。」

やるべきことがやりきれているか一つひとつ点検し、やりきれていないことをやりきっていくこと。それが総合力を高める道である。

(四)

国労の単一団体が崩れると総合力は極度に低下する。単一団体を維持する道は決め合ったこととはやりきることである。この指摘はもつともである。単一団体の崩壊の危機は国労らしき崩壊の危機である。その危機は全面解決の仕方に深く関わり、全面解決の過程で彼我の最大の争点となるだろう。

今回の和解のなかで「路線転換」が、むしろ国労の外で話題になった。それを一笑に付したり、軽視すべきではない。こちらの期待や願望にかかわらず、権力の意志は融通自在に貫徹するからである。国労が全面解決を勝ち取った暁に、国労が現在の戦闘的少数派組合にとどまるか。JR総連Ⅱ革マル主導の労使関係が崩壊し、国労がとってかわっているか。そのときJR連合との関係はどうなっているか。今からあれこれ先走って考えても仕方がないというかもしれないが、権力側が「解決の土俵」を口にする以上はその辺の戦略は練られているとみななければならない。

しかし、今回の和解における国労の「表明」は彼我の抽象的な意思表示にとどまっている。彼の解釈と私の解釈に食い違いがある。全面解決後の労使関係のあり方について、権力側の意思は実行段階に入るまでにはまだ固まっていけないからである。これからさき、社会党は消滅し、国労のような労働組合の存在は連合体制の下で文字どおり死活が問われよう。そうなる矢先の「全面解決の緒」が今回の和解であった。気を許し、矛先を収めれば国労の危機は一挙に進む。その危機は、これからもずっとつきまとい避けては通れない。だからといって、解決のチャンスを見すみす掴まないのは思弁先行の待機主義である。したがって、中央委員の次の指摘を肝に命じ、これからの戦略構想の糧としなければならぬ。

①主体的力量を過大評価することなく、相手側の意図を正確に見極めること。とりわけ、村山内閣の性格、連合の現状など全体の情勢について一致した理解をつくること。②現場と本部が二分しないように、解決にあたって道筋を然るべき時期に示すこと。③JRの不当労働行為の根絶を置き去りにすることなく、解決のあと国労が流れ解散にならないように国労の強化・拡大に全力をあげよう。

(木乃川)

「二〇二億損賠」「取り下げ」の成果を次の闘いへ

昨年十二月二十四日、突然「清算事業団と国労の間で二〇二億損賠訴訟の取り下げが意された」とのマスコミ報道が流れた。私は当事者の国労組合員として、驚きと多少の戸惑いを感じた。取り下げそのものは願ってもないことだが、少々唐突でありまた、マスコミ報道の多くが「国労の方針転換・会館明け渡しの代償としての取り下げ」を示唆するような内容だったためである。しかし、本部からの資料に目を通しているうちに、このことは国鉄闘争を前進させる大きな成果と感ずるようになったが、一方では多少の不安を感じる何とも中途半端な気持ちで年末・年始を過ごした。

年が明けて、会議での報告を聞き、資料を読んで、このことは国鉄闘争全体に大きな意味を持ち、いよいよ闘争が決戦段階に入りつつあると感ずるようになった。ところが、会議などでの仲間の反応がどうも今一つの感じで、局面の重要な展開を前にして本部の交渉経過に対する不信と一月十一日に中闘が決定した「解決にむけた考え方」は要求の切り下げではないか（実は私もその疑問が全くなしとは思えないが）との疑問も出され、とても大きな成果を挙げて、その勢いで闘いを大きく前進させようとの雰囲気ではない。また、自分の闘争団の中で報告しても、反応が今一つ鈍い。むしろ自分のほうが何か勘違いをしているのかと不安になってしまった。

その後、旭川地本の社会党員協で永田委員長から交渉経過の報告を聞く機会があり、また本誌五九四号の佐野修吉さんの論文を拝見して多くの点で共感し、国鉄闘争の渦中にいる闘争団の一人として、現時点での自分の意見を表明しておくことがこれからの闘いに良いのではないかと思ひ考えをまとめてみた。もちろん私の考えがどの程度妥当かは今後の闘いの中で検証されるし、全く違う意見もおおいかと思うので、意見をいただき私も勉強できればと思う。

【二〇二億損賠取り下げの意義】

国鉄闘争に関わりを持った者にとって、二〇二億損賠の取り下げの意義を否定する者は誰もいない。今年三月と予想された判決が国労にとって極めて不利なものとなることは残念ながら覚悟をせざるをえなかった。かつての「大」国労ならともかく、今の国労がこの判決を真正面から受け止めて闘うことは、仮に仮差し押えを防げたとしても、組織問題などの負担は極めて大きく、取り下げを求め、それを実現したことは大きな成果と考えるべきものである。

問題は取り下げの成果と代償とされたものの価値が妥当なのかということであり、もうひとつはこの交渉の中で大きな役割を果たしたと言われる「反動」「タカ派」の亀井運輸大臣がなぜ国労に肩入れするような動きをしたのかがわからないところに判断の戸惑いの元がある。

結果から言って会館の立ち退きは、心情的なものを別にすれば、いずれ和解の条件しだいで判断するしかないことであつたし、「分割・民営化されたことを認める」文書の運輸

大臣への提出も、亀井運輸大臣が自民党と官僚を押さえ込むための「言い訳」に使うために必要だったと考えるならば、国労として許容できる範囲のものであった。運輸官僚は、会館の無償立ち退きと、国労に「分割・民営化は正しかった」と表明させたかのようなが、記者会見での永田委員長の発言内容からも必要以上の譲歩をせずに押し切ったとみるべきだと思う。まして、方針転換などと言われるものではないことは記者会見の記録からもはっきりしていると思う。

【国鉄闘争全体の中でどうみるか】

今回の取り下げの経過の中で多くの人が、「なぜ亀井運輸大臣が運輸官僚をおさえる動きをしたのか」に興味と不安を抱いている。一闘争団長である私に正確な分析ができる能力も情報も持ち合わせはないが、最近、情勢の報告を受けるうちに政治の場での大きな変化を強く感じていた。

詳しい分析の展開をするだけの余裕はないし本誌の読者の皆さんに余分な説明をする必要もないと思うが、昨年十一月に旭川地本の学習会でこんな解説をしてくれた。『①財界はJ Rを見限り紛争を解決したほうが得策と思い出した。火の粉が自分たちに飛んで来るのをいやがっている。②自民党は国労を潰しきれないと判断し、逆にJ R総連（旧動労）が企業の中枢まで食い込むJ R東に苦り切っている。そして分割・民営化十年目に向けて矛盾の糊塗のためには紛争の解決を選択せざるを得なくなった。敵の包囲網はすでに分断されている。』

亀井運輸大臣の「変心」はこの延長で考えて良いのではないか。したたかな政治家が冷静な分析の結果、国労との関係改善を選択した方が（自分自身にも）得だと計算しただけのことであり、それ以上でもそれ以下でもない。

我々は敵の内部矛盾を見抜いてそれを利用してそれを身につけても良い頃ではないか。もちろん一つ間違えば、引き込まれる危険があることには充分注意しての上であるが。

今回の二〇二億取り下げは、この包囲網からさらに運輸省が手を引いたということであり、同時に国労攻撃最大の武器を放棄したことを意味する。いまだに国労敵視に奔走するのは、J R各社とJ R総連のみになり、逆に彼らの方が包囲されつつある。局面は大きく変わった。

【なぜ本隊が冷やかなのか】

ところが冒頭に書いたように、私の聞く範囲では国労内部からはどうも冷やかな反応が多い。これはいったいどうしたことか。単にまだ充分に情報が行き渡っていないだけなのか。

その原因は幾つかあると思うが、その一つは一月十一日に中闘が決めた「解決に向けた考え方」の解釈にある。本部は、「全面解決要求の具体的道筋」と説明しているし、永田委員長も要求を下げたと言うことではないと強調している。しかし一方で「交渉の前に、被解雇者のJ R復帰後に本人の希望による退職の条件を文書にしている。その必要があるのか。広域採用者の扱いは被解雇者の復帰の後になっているが、全動労の絞り込みと同じ

ではないか。」と疑問が出されている。私はこの疑問には全く根拠がないとは思えない。なぜこの時期に中斷で決めて、中央委員会で承認という手続きになるのか。しかもそれが即日マスコミで報道されるから余計に増幅されてしまう。今回の経過の中で唯一心配な事である。

この疑問が生まれるのは今闘争がどのような段階にあるかの認識の違いがあるような気がする。採用差別事件が実質的に交渉が始まっているのだと考えれば本部の判断は合点がゆく。ただし、その内容が妥当か否かは別である。私は広域採用の仲間の解決が被解雇者の解決と時間差をつけることには賛成しかねる。少なくとも大筋合意は同時であるべきと考える。情勢の見方と、「解決の考え方」については全組織をあげての討論が必要だと思つ。

もう一つは、佐野さんも婉曲に指摘したように、我々はこの十年間、局地戦での戦術的勝利は多く積み重ねてきたが、戦略的には期待はずれが多く、敵を撃破したという実感が希薄なために、十分に自信を回復できず今回の成果を受けとめ切れないのではないかと感じる。またこの間幾度となく国労内部の一部から本部に、「早く決断すべきだ」との突き上げがあったことが、今回の成果にもかかわらず本部への半信半疑の気持ちを生じさせているのかもしれない。

【成果をしっかりと確認し次の闘いに】

私が身のほどもわきまえずこの文を書く気になったのは、我々が戸惑っているうちにせっかくのチャンスを我々自身が逃してしまうのではないかと危惧を持つからでもある。今回の取り下げは、十年になろうとする国労組合員と支援・連帯してくれる多くの仲間の闘いが、敵の戦線を分断し勝利への展望を切り開いてきたことにもっと自信を持って良いのだろう。残るJRとJR総連は死に物狂いで巻返しにかかるだろうから、今回の成果を国労組織が総体で確認し、JRの職場で士気を高め、組織戦に勝ち抜かなくては、とても十分な水準の勝利は得られない。現にJR総連は北海道知事選で、伊東秀子支持を決定して自民党への擦り寄りを図るなど反応は早く、手回しはいい。

むしろこれからが本当にたいへんな闘いになると思う。本部への懸念は分会・支部段階の討論を持ち上げて支えよう。「全面解決要求」を、もう一度自分の譲れない要求として討論を組織しよう。JRの職場ですべきこと、闘争団のすべきことを一人一人がやりきろう。

(国労紋別闘争団・清野隆)

(十八頁よりつづく)

私にも一言 昨今の貴誌の論調は社会党「脳死」↓「護憲ネット」が強調され、総支部、支部から社会党の本来の路線で再生しようとする闘いの報告が少ないようです。上ばかり見ないで現場労働者の実態から党再生もあるのでは。

(千葉・M)

激動期ガンバレ 激動期、めげずたゆまず(札幌・T)、いよいよ決断の年(奈良・I)、九六年一月頃はどうなってるかしら(茨・T)

編集部より 多くのおたよりありがとうございます。政治は権力、国家の問題です。「下」からの運動はもつとも重要。そのためには、社会党内外をゆり動かす大衆運動が必要です。従来どおりの、「社会党強化」で十分でしょうか。この点、仲間で論議の必要があると思うのですが、いかがでしょうか。

資料 「二〇二億」訴訟和解に関する要請（ＪＲ総連・九五・一・一三）

国労との「和解」にはだんこ反対

一、国鉄改革は一一〇年の国鉄の歴史に幕を落とした国家施策の重要な柱であり、ＪＲ総連の組合員は積極的に推進しています。

二、今日、国鉄改革は道半ばであり、労使協力しなければ完全遂行は出来ないことになり
ます。

三、今回の「二〇二億」問題の処理は、国鉄改革完全遂行にとって大きなマイナスであり、
ＪＲ総連として認め難く、その趣旨については過日運輸大臣会見の場において述べたと
おりです。その理由、

第一、もつとも苦勞してきた当事者であるＪＲ総連などに何らの連絡もなかったこと。

第二、国鉄改革にことごとく反対し、今日においても全く変わっていない国労を救済
したことは、苦勞してきたＪＲ労使を否定する何ものでもないこと。

（国労が二枚舌を使い基本路線をかえていないことは「国労企画発文書」などで明ら
かになっています。〈別紙〉）

第三、国労は、その上になつて「不採用」問題について、この間の経緯を無視し自己
努力を放棄した内容を求めてくるであろうことは火をみるより明らかです。

第四、今回の処置によって労使間、労々間に不信感を増大し、国鉄改革とＪＲ発展に
とつて大きな悪影響を及ぼすこと。

四、以上の理由に基づいて、以下の通り解決を求めます。

① 国労との間で大臣が取り交した「分割・民営化されたことを認める」ということ
は、ＪＲ総連組合員が行ってきた苦勞（「三本柱」の履行など）を、国労も行うと
いうことを明確にされたい。

「健全かつ正常な労使関係の構築に努力」ということは、ＪＲ総連などが会社と
の間で確認してきた「労使共同宣言」を取り交し、かつ、その内容に基づいて具体的に
努力することであることを明確にされたい。

② ＪＲとの間で係争中の案件の取り下げについて明確にするようにされたい。

③ ①②の事項について、その実施が確認されるまでは、今回の措置は撤回し、改め
てＪＲ総連を含めた当事者との協議を進め結論を得るようになされたい。

五、以上の事柄について、会見を要請しますので日時等について設定していただきたい。

以上の問題点が適切に処置されない場合、ＪＲ総連としては改めて対応を考慮させてい
ただくことを申し添えておきます。

◇ 読者からのおたより ◇

わが家は全壊 毎日ご苦労さま。さて阪神大震災により、私の家は「全壊」となり、郵便物が届きませんので、次の住居が決まるまで下記のとこに、送付ください。なお、部数には変更ありません。

(神戸・N)

編集部より 言葉がございません。私の事務所を手伝ってくださいているK子氏の出身は明石。「全壊」はまぬがれたものの損壊はげしく建て直す他ないとのことです。私どもにできることお申しつけください。

市当局に高まる不満 先日、長田の御蔵小学校で市の職員が金属バットで殴られました。物資を配っている行列に横入りしようとしたおばさんが、行列に並んでいる人に叱られて泣いて帰ったのですが、その後「誰がいじめたんや」と亭主が金属バットを持って現われた時、群衆の中から「市の職員や」という声が上がって、近くにいた市の職員に襲いかかったのです。

こうした事件はいつ起こっても不思議ではありません。神戸市は避難所の居心地を悪くして追い出すように運営しているからです。県の避難所パトロールで不満を聞いて、神戸市に伝えても何もしようとしません。県に集まる物資を神戸市に渡そうとしても「いりません」と拒否され、県には物資がたまる一方ということ。神戸市は避難民に耐え難い環境を与えることで問題の解決を図っているようです。こんな中で老人や病弱者が次々に死んでいます。神戸市に殺されているのです。福祉を切り捨て、開発によって儲けることばかり考える自治体行政は命を大切にしない行政ではありません。(神戸・A)

編集部より 近く仲間とうかがいたいと考えています。お身体大切に。

変転さわまりない情勢 今日、何が正で何が邪か迷うほど変転さわまりない情勢の中で、誤まりない活動をしなればと思うとたいへんです。長崎に「護憲リベラル」の看板をつけた車があります。どなたが活動しておられるのか、分ったら教えて下さい。(長崎・N)

編集部より 「護憲リベラル」の友人に聞いてみます。

チューター二〇周年集会大成功 七五年に国労東京チューター養成講座をはじめ、途中「国鉄の民営分割」があり、今年二〇期になりました。記念集会には初期の講師であった鎌倉孝夫先生から、党学校よりレベルの高い講義をしたとお話があり、作家の加藤多一さんは自らの生い立ちと北海道稚内での闘争団との出会い、生活の場をおとした交流の様子を文学を語るかのようにお話しただき感動しました。朝日新聞記者の石川真澄さんからは村山政権の今日の状況と今後の動き。集会は予備椅子を出しても座り切れないというほどの大盛況。闘争団や地域の仲間が多く参加したのです。「記念パンフ」発行の予定。

(東京・吉田、脇田)

編集部より 国労チューター養成講座は私の人生。ご盛会おめでとう。さらに励んで。ちよつと心配 国労の二〇二億円和解の内容がよく分りません。「国鉄が分割・民営化されたことを認める」というのは、屈服宣言でなければいいのですが。(国労応援団・Y子)

編集部より 心配事よく分ります。国労を信頼しようよ。「通信」の記事も参照を。

上部機関に文書 私たちの党支部では上部機関に、基本路線を守り今までどおり活動を進めることを確認した文書上げました。地区平和センターは社会党護憲派との協力・共闘を明確にし活動を進める方針を決定しました。中央でもがんばって。(北海道・I)

「通信」待ってます 活動家へのピラおろしの途中、動員車が事故(幸い物損のみ)。仲間

が脳梗塞で入院。ドカ雪で対向車からどなられる…。冬、雪の中の選挙戦はまさに命がけ。動きたくない、しかし吹雪の中、ピラを持って走ってくれる仲間の姿を思いガンバローと自分を励ます。「通信」待ってます。

(札幌・S)

(十六頁につづく)